フィリピン・コミックスの"死"について

カール・イエアン・ウイ・チェン・チュア クリスティン・ミシェル・サントス 西原麻里 訳

1930 年代から始まったフィリピンのコミックス業界では、「コナン・ザ・バーバリアン(Conan the Barbarian)」(1982-1989)の作画担当であったアルフレド・P・アルカラ(Alfredo P. Alcala)、1992 年に設立の出版社「イメージ・コミックス」の創設者の一人であったウィルス・ポータシオ(Whilce Portacio)、1996 年からマーヴェル・コミックスで活躍しているインカーとして有名なジェリー・アランギラン(Gerry Alanguilan)など、かなりの数のフィリピン人作家がアメリカン・コミックス産業に従事している。それにもかかわらず、彼らの存在は国際的にはほとんど知られていない。

そこで本章は、(1) フィリピン・コミックスの歴史を辿りながら日本の読者にフィリピン・コミックスを紹介すること、(2) フィリピン国内のコミック研究において重要なテーマとなっている、フィリピンのコミック産業の"死"について読者を議論に誘うことを目的とするものである。

フィリピン・コミックスの歴史について論考を進めるまえに、フィリピンにおけるコミックスという言葉はアメリカン・コミックスを起源としており、その影響を反映しているため、「comics」ではなく「k」を用いて

「komiks」と表記すること「を強調しておきたい。本章ではこれ以降、アメリカン・コミックスについて述べているときにはカタカナで「アメコミ」²、フィリピン・コミックスについて述べる場合は「コミックス」と表記する。「comics」から改変された「komiks」という語は、アメコミからの強い影響を表していると同時に、それを裏切ってもいるのだ。その影響はまず、戦後にフィリピンのコミックス専門雑誌が横 18×縦 26.7cm のサイズ、36から 45ページという基本的な規格で出版され始めたときからみることができる。しかし、以下でフィリピン・コミックスの歴史を概観していくとわかるとおり、フィリピン・コミックスの始まりとフィリピン・コミックスの現状をみると、出版形態は徐々に変化していく。

また本章では、フィリピン・コミックスの"死"と評されるテーマを 考察することで、コミックス産業の最近の状況について、また作家や出版 社などが他のメディアや外国のコミックスとの競争による強制的な変化に どのようにして適応するのかについて、一つの視点を提供する。

1. フィリピン・コミックス史の概観

フィリピン・コミックスの歴史を記したもっとも早い時期の著作の一つに、『フィリピンと他国のコミックス史(A History of Komiks of the Philippines and Other Countries)』(Marcelino, ed. 1985b)がある。この文献では、フィリピン・コミックスの誕生はフィリピンの国民的ヒーローであるホセ・P・リザール博士(Dr. Jose P. Rizal)からだと位置づけられている。それ以降の研究によって、リザールがひじょうに多作な作家であったことが明らかとなった(Fadul 2008)。リザールの最初の作品とみなされているものは、有名なフィリピン人画家の妻のためによく知られた民話をスペイン語に翻訳・作画した『サルとカメの人生(Ang Buhay ni Pagong at

¹ 訳注:原文を参照のこと。

² 訳注:「アメコミ」とは、北米のすべてのコミックではなくスーパーヒーローものを中心とするコミックブックを指すが、まさにそれがフィリピンにもっとも大きな影響を与えたので、筆者は日本語でのこの言葉遣いを優先している。

Matsing)』(Marcelino, ed. 1985a)(図 1)である。しかしそれよりも前に、彼はドイツの絵本『マックスとモーリッツ — 七つのいたずらの話(Max und Moritz)』(Busch 2013)を自身で翻訳して『兄弟(Two Brothers)』(図 2)というタイトルをつけて描き直し、1887年にドイツへ訪問した際に、滞在したドイツ人牧師一家の息子へプレゼントとして贈っていた。リザールはまた、甥と姪のために、ハンス・クリスチャン・アンデルセンの『おやゆび姫』(Ocampo 2011b, Si Gahinlaki)と『みにくいアヒルの子』(Ocampo 2011c, Ang Pangit na Sisiu ng Pato)を翻訳・作画した。彼の最後の作品の一つは『魔女の覚書』という 1892年に制作したと思われるもので、ビサヤ族の魔術についての読み物を依頼してきた友人のための絵本だった。

リザールの作品をみると、上部に絵・下部にキャプションを組み合わせる絵物語の形式から、コマの内部ではないがコミックスに近い形で画像とセリフとを組み合わせる形式にいたるまで、多様な表現形式で制作されていることがわかる。しかしそれらの作品は一般向けに出版されたものではなく、限られた者への個人的なプレゼントとしてのみ制作されていた。

そのため、「フィリピン・コミックスの父」という称号は、アントニオ(あるいはトニー)・S・ベラスケズ(Antonio S. Velasquez)に捧げられるようになった。ベラスケズは、タガログ語の週刊誌『リワイワイ(Liwayway)』で活動していた作家である。『リワイワイ』は 125 ページからなる文芸雑誌で、連載短編小説、小説、詩、ニュースなどが掲載されており、ビサヤ語、ヒリガイノン語、イロカノ語、ビコラノ語といったそれぞれの地域の主要言語に翻訳され、フィリピン全国で流通していた。初のフィリピン・コミックスは、ここから登場したのである。その作品は、ロムアルド・レイエス作、ベラスケズ画の『マンガ・カバルバラン・ニ・ケンコイ(Mga Kabalbalan ni Kenkoy)』(図 3)で、「ケンコイ」というあだ名をもつフランシスコ・ハラバス(Francisco Harabas)が主人公である。この作品は2ページ構成のアメコミ風で、フィリピンに西洋文化が到来しアメリカから影響を受けた時期に創作された。ケンコイはこの新しい文化に馴染み、それを普及させる者として描かれていた。彼は古い世代を嘲笑しながら、最新のファッションに身を包み英語をも話そうとするが、ときどき言葉に

ひっかかり、タガログ語やスペイン語が混ざった英語を話すというキャラクターである。ケンコイが人気を博すと、ベラスケズは作画に加え物語も手がけることとなったが、それ以降、本作は『リワイワイ』の各地方言語版に掲載された(Marcelino 1985a: 4-11)。ケンコイやそのほかの登場人物たちは、フィリピンが第二次世界大戦へと足を踏み入れたさいに、日本が出資した新聞においてプロパガンダとして利用されたほど影響力のある人気キャラクターであった(Cheng Chua 2005: 59-90)。しかしベラスケズは、ケンコイがフィリピン初の長寿作品であるという点だけで「フィリピン・コミックスの父」とみなされているわけではない。彼が後に経営したコミック雑誌で、他のコミック作家たちに出版の場を与えたためでもある(Solo 2013)。

戦後、ベラスケズの指揮のもとで『ハラックハック・コミックス(Halakhak Komiks)』(図 4)が 1946 年 11 月 15 日に創刊した。この本は『リワイワイ』とは異なり、週刊で全 40 ページ、そして初めてのコミックス専門雑誌であった。また、掲載されるコミックスは 1 ページのものと 4 ページの連載ものとで構成されており、戦前から普及してきたアメコミの表現形式を受け継いでいた。ところが残念ながら、このコミックス専門誌は10 号しか発行されず短命に終わってしまった。

しかしベラスケズは、『ハラックハック・コミックス』の遺産を受け継ぐようなコミックス雑誌を発行する出版社の社長となるよう、申し出を受けた。そこで、「エース・パブリケーションズ(Ace Publications)」というフィリピン最大のコミックス雑誌の出版社が1947年に設立されたのである。1947年6月14日に発売をスタートさせた最初のシリーズは『ピリピノ・コミックス(Pilipino Komiks)』(図5)といい、1万部が発行された。発行から10年後に部数はピークを迎え、12万部以上も発行された。ベラスケズはこの成功によって、1949年から『タガログ・クラシックス(Tagalog Klasiks)』、1950年に『ヒワガ・コミックス(Hiwaga Komiks)』、1952年に『エスペシャール・コミックス(Espesyal Komiks)』、1959年に『ケンコイ・コミックス(Kenkoy Komiks)』、そして最後には1962年に『エデュケーション・クラシックス・コミックス(Education Klasiks Komiks)』という5つのシリー

ズを生み出した。前身の『ハラックハック』と同様に、これらの雑誌はいくつかのコミック・ストリップや、38から42ページのアメコミ式の連載作品によって編纂されている。しかし、これらのシリーズが成功を収めることができたにもかかわらず、1962年に出版元は倒産を余儀なくされた。

エース社は閉鎖してしまったが、投資家たちは有益性のあるコミックス市場に着目し続けていた。そこでベラスケズは再度掛け合い、1962年8月1日から「GASI(Graphic Arts Services Incorporated)」の経営をスタートさせた。GASIから出版されたシリーズ作品には、1962年9月に『キスラップ・コミックス(Kislap Komiks)』(図 6)、同年10月に『パイオニア・コミックス(Pioneer Komiks)』、1963年1月に『アリワン・コミックス(Aliwan Komiks)』、同年8月に『ピノイ・クラシックス(Pinoy Klasiks)』、9月に『ホリデイ・コミックス(Holiday Komiks)』があり、そして1968年には『ティーンズ・ウィークリー・コミックス(Teens Weekly Komiks)』が発刊される。GASIは、1972年の戒厳令の布告や検閲の対象となったことによって損害を被った。しかしそれでも生き残り、1982年には『ノベラ・クラッシックス(Nobela Klasiks)』、『クェント・コミックス(Kuwento Komiks)』、『ダムダム・コミックス(Damdam Komiks)』といった新しいシリーズを出版することができた。ところがGASIも、1998年にはついに閉鎖する事態となり、これらのシリーズも続々と中断を余儀なくされる(Villegas 2007)。

こうして、コミックスの消費は崩壊してしまった。この背景としてはいくつかの要因が挙げられた。まずは、テレビが出現した点である。フィリピンでは、テレビが1970年代から広く普及し始め、映画がより多くの人に視聴されるようになった。また、放送費が安価であったことから、フィリピンの番組に日本のアニメが忍び込んできた。ジョン・レントは、即時的な娯楽で満足感を得るために、テレビ視聴者の振る舞い方が変化したと述べる。つまり、テレビが出現したことによって、コミックスの消費者はもはや1ヶ月あたり4ページしか発表されない連載作品の続編を待つことなどできなくなったのだ。こうした新しい需要に対処するために、コミックスは隔週で出版されるようになった。しかしそのために、出版スケジュールが早いサイクルに変化し、作品の質よりも発行のペースのほうが重要

視されてしまったため、この変化はむしろ逆効果であったことが明らかとなった(Lent 2009: 97–99)。

人気シリーズの廃刊や巨大出版社の倒産にもかかわらず、数多くの人気作が発行され続けていた。その一つが『ピリピノ・ファニー・コミックス (*Pilipino Funny Komiks*)』(図7)である。これは、『リワイワイ』や『ハラックハック・コミックス』のエース社と GASI を所有していたローセス (Roces)一族が経営する「アトラス・パブリッシング (Atlas Publishing)」の子会社である「イスラス・フィリピナス出版社 (Islas Filipinas Publishing Co., Inc.)」によって、1978年から出版された。この本は大人を中心的読者層と想定していた前誌とは異なり(フィリピンのコミック作家が自主規制していたため、実際にはあらゆる年齢の者が読むことができたけれども)、おもに若い読者をターゲットとしていた。もっとも最近のものでは、2005年に1405号が出版されている (Alanguilan 2008)。

2. フィリピン・コミックスの"死"

フィリピンの評論家たちの多くが、新聞記事やインターネット上のブログでフィリピン・コミックスは"死"を迎えた、と宣言している(Alanguilan 2010; Barcelona 2009; Robles 2012)。マルセリーノは、アメコミ作品や、ラジオ、テレビ、映画といった新しいメディアが台頭した影響によって、フィリピン・コミックスが落ち目になったと主張する(Marcelino 1985b: 4-46)。またレントは、近年登場したインターネットがコミックス産業に対する新たな競争相手だと位置づけている。彼は、コミックス出版業界で生き残るための現実的な方法として、出版社がコストを削減し、作家たちの賃金が低くなり、紙や印刷などに材質のよくないものを使い続けてしまっていると述べる(Lent 2004: 94-95)。

コミックス作家であり歴史家でもあるジェリー・アランギランによれば、出版業界がコミックスを等関視したことによる低賃金・低コスト化は、憂慮すべき事態である。また、国立図書館といった施設は、次世代へのコミックスの保存にまったく価値を見いだしていない(Flores 2008)。さらに、

売り手側が手元にあるコミックスを販売する代わりに、コミックスを3時間あたりで安値で貸し出すことで利益を増やそうとするようになった。しかしそれは、出版社の収入とはならなかった。

ローレンス・ミハレス(Lawrence Mijares)は、ローセス一族によって出版業界が独占されたためにコミックス産業が"死"に至った、ということについて、異なった見解を示している(Valiente and Salvador 2007: 52–56)。ミハレスによれば、ローセス一族はフィリピン全国で関連会社を手中に収め、コミックス市場の流通を独占しようとした。そのため、ローセスの競争相手となる者がもしこの業界へ参入したいと考えた場合は、この巨大な出版社ネットワークに負けないような流通システムを作らなければならなかったのである。とはいえそれが実現することはなく、市場を支配していたローセス一族による出版活動の停止によってコミックス産業が終局を迎えてしまったというのは、自明のことであった(Flores 2008)。

しかし、コミックス産業はほんとうに死んでしまったのだろうか? 作家たちはもちろん、マルセリーノやレントも同様に、エース社と GASI が盛衰した1972年までの戦後の"黄金期"を比較対象としている。この"黄金期"は、コミックスが1巻あたり2万部から12万部までも売れた時代で、市場ではアメコミ風のコミックスが支配的であったことが特徴である。 そうはいってもやはり、ローセス一族によるエース社と GASI は、コミックスが普及するための産業を開拓していたのだ。そのため、大手出版社はなくなってしまったが、小規模のところは細々と出版を継続している。

近年では、多くの作家が自費出版によって作品を本にするようになっている。人気作では、ポール・メディナ(Pol Medina)による『プガッド・バボイ(Pugad Baboy)』(図 8)という新聞連載のコミック・ストリップの単行本化であり、1988年以降、25巻が世に出ている。また、リンドン・グレゴリオ(Lyndon Gregorio)による『ビーアカダ(Beerkada)』は、1998年から10巻まで出版されている。

こうしたコミックス出版業界に刺激を受けた数名の作家たちは、1994年に「アラマット・コミックス(Alamat Comics)」という自分たち自身の出版社を立ち上げ、ジェリー・アランギランの『ウェイステッド(Wasted)』

やイアン・サンタマリア(Ian Sta. Maria)の『スカイワールド(Skyworld)』などの作品を創刊した。同じく、『シグロ — フリーダム(Siglo: Freedom)』(2004)や『シグロ — パッション(Siglo: Passion)』(2005)を世に送り出した「ノーチルス・コミックス(Nautilus Comics)」や、マース・ラヴェロ(Mars Revalo)による 1950 年の『ダーナ(Darna)』(図 9)、1964 年の『ラスチックマン(Lastikman)』といった古典的コミックの改訂版を出版した「マンゴー・コミックス(Mango Comics)」といった出版社もある。またそのほかの作家たちは、コミックス制作の経験のない会社から作品を発表しており、2005 年にアニモ・ブックス(Anino Books)から『ザ・ミソロジー・クラス(The Mythology Class)』という作品が出版されたアーノルド・アーレ(Arnold Arre)や、2002 年に「ビズプリント(Vizprint)」から出された『アング・カギラギララス・ナ・パキキパッグサパララン・ニ・ザザ・ザツーナー(Ang Kagilagilalas Na Pakikipagsapalaran Ni Zsazsa Zaturnnah)』(図 10)のカーロ・ヴェルガラ(Carlo Vergara)などが挙げられる。

2005年に開催されたフィリピン初のコミックス・コンベンションもまた、地元の作家たちにとって作品を発表したり販売したりする場となった。このコンベンションは、2009年以降は年2回開催されるほどまで発展している。また2012年には、新人作家をとりあげたり、アマチュアのコミック作家が自費印刷した作品を売ったりするという、インディーズ作家のイベントも始まった(Philippine Komiks Convention 2013)。

以上、フィリピン・コミックの歴史を概観するとわかるとおり、市場においてコミックスが一切存在しない時期はなかった。フィリピン・コミックスの"黄金期"として認められていたものとは、結局のところ、ただ一つの会社が自らのシリーズをもって市場を独占していただけにすぎない。上述のとおり、数多くの本が消え発行部数がいちじるしく減少しているにもかかわらず、コミックス産業はむしろ以前にくらべてより活動的になっている。それは、小さな出版社と自費出版が活発におこなわれたことによるものである。さらに、コミックス作家は同人誌で市場に参入するための活動の場を構築するようにもなった。

アメコミやのちの日本マンガは、そもそもフィリピンのコミック産業 と競合するものとして非難を受けていた。しかし事実として、現在の市場 の形成と発展、作家たちの雇用の場、さらに新しい表現形式への刺激をも たらした。マンガ・スタイルのコミックスはいまや、フィリピンのコミッ クス産業に受け入れられている。その先駆的な雑誌の一つが、1999年か ら 2004 年まで発行され、日本のマンガに影響を受けたフィリピン・コミッ クスの連載ものを取りあげた隔月刊雑誌の『カルチャー・クラッシュ・ コミックス (Culture Crash Comics)』である (Culture Crash Comics 2009)。 消費者たちは新しい表現形式に興奮し、そのような作品をますます多く求 めるようになった。そこで、『カルチャー・クラッシュ・コミックス』に 続き、2007年に『マンガホリックス (Mangaholix)』という月刊誌 (不運 にも一年間弱しか存続しなかったが)も登場した(Valmero 2008)。また、 2011 年に創刊した『オー・ノー! マンガ (Oh No! Manga)』という、別の コミック雑誌もある ("OhNoManga on deviantART" 2013)。アメコミ式作 品の出版社だったマンゴー・コミックスまでも、女性の読者向けの『マン ゴー・ジャム(Mango Jam)』というマンガ・スタイルの雑誌を創刊した (Yonzon Studios 2013)。そのほか、2008 年から始まり 5 巻まで出ているエー ス・ヴィタンゴル (Ace Vitangcol) の『ラヴ・イズ・イン・ザ・バッグ (Love is in the Bag)』という人気作(Vitangcol et al. 2008)に後押しされて、日本 マンガの単行本に影響を受けたコミックスも続々と出版されている。

コミック作品がテレビやラジオ、映画でメディアミックスされるようになってからは、これらの媒体もまた、コミック産業に関わる人々にとっての仕事の場となった。『プリンシペ・アマンテ(Prinsipe Amante)』、『クルダッピャ(Kurdapya)』、『バタス・ナング・アリピン(Batas ng Alipin)』はラジオドラマに、『ダーナ(Darna)』、『カピタン・バーベル(Kapitan Barbel)』、『プガッド・バボイ(Pugad Baboy)』はテレビドラマにメディアミックスされた。そして『ザザ・ザツーナー(Zsa Zsa Zaturnnah)』は映画になっただけでなく、バレエ作品として上演もされた。最近では、長期に渡って放映されたテレビドラマ『マアラアラ・モ・カヤ(Maalaala mo Kaya)』がアメコミ・スタイルの作品となってマンゴー・コミックス

から出版されるという、逆の現象も起こっている。類似例では、『チクチク――ジ・アスワング・クロニクルス(Tiktik: The Aswang Chronicles)』が挙げられる。さらに、紙媒体からオンライン新聞へと移行したポール・メディナ・Jr. (Pol Medina, Jr.) のような作家にとっては、インターネットが作品を出版するための一つの選択肢となった(Go 2013)。「フリップリーヅ(Flipreads)」という会社にも同様のことがみられる。このように、インターネットは新しい流通の場でもあるのだ。

しかし、こういった新しい事業がそれぞれに課題を抱えていないわけではない。過去にあったエース社や GASI のような巨大企業に頼ることのできない新規参入会社のいくつかは、収益と流通ネットワークとが充分でなかったために、やがて撤退してしまった。同じように、コミックスの出版経験のない会社は、部数を上げることに対して慎重になる。つまり、発行部数を制限したり自社で出版した作品の再販もしなかったりすること、そして連載ものの出版を中止してしまう場合がよく起きるのだ。例えば、ブッジェット・タン(Budjette Tan)とカホ・バーディッシモ(Kajo Baldissimo)による作品『クウェンチリョン(Kwentillion)』(2012)が2巻の出版に至ることができなかったのは、かつてのようなスタジオ・システムがなく、共同制作している2人の作家がインデペンデントで働いていることや、連載雑誌の出版社「サミット・パブリッシング(Summit Publishing)」が十分な資本を持っていないことによる("Kwentillion Magazine: A New Source of Young Adult Entertainment" 2012)。

さて、ここまでで、フィリピン・コミックスの"死"とはなにか、という問いについて言明してきた。簡略にまとめれば、この"死"とはエース社と GASI との巨大な流通ネットワークがなくなってしまったことを要因とした、読者数の減少を意味する。コミックスが新聞の売店や新聞売りの少年たちによって販売されていた、そしてローセス一族が広範に作りあげたネットワークによる書店があった"黄金期"。それが終わった、つまり流通システムがなくなったという事実は、読者たちが、日刊、週刊、そして月刊のコミックスをわざわざ遠くまで買いに行こうとしなくなったことを示している。コミックスは粗雑な紙に印刷されただけでなく、作家た

ちも低賃金であったため、コミックスは安価で生産され、さらに販売価格 も低くなった。さらに、新聞販売者側が自分たちの利益を増やすために、 販売の代わりに貸本屋としてコミックスを貸し出していた。しかしそうす ることによって、コミックス産業は被害を受けてしまったのである。

3. "ポピュラー"文化

アメコミの人気は、コミックス専門店の出現を促すこととなった。フィリピンでアメコミを販売した最初期の書店が、1979年の「フィルバーズ・アンド・カンパニー(Filbar's and Company, Inc.)」である(De Vera 2013a)。そのほかには、1986年に「コミック・クエスト(Comic Quest)」、1997年には「コミック・オデッセイ(Comic Odyssey)」がオープンした。これらの書店が誕生したおかげで、コミックスを借りるだけでなく、本そのものを購買する動きが起きたのである。

しかし、コミックス専門店のほとんどは首都マニラに集中していたた め、本の流通が制限され、全国的には普及していなかった。コミックス を手に入れたい場合、コミックス専門店以外の選択肢としては、総合書 店が考えられる。1930年代以来、「ナショナル・ブックストア(National Bookstore) | がチェーン展開しており、いまやフィリピン中に 145 店舗以 上がオープンしている。そのほかの書店では、15の支店をもつ「フリー・ ブックド(Fully Booked)」があり、そのうち4店舗がマニラ以外にある。 コミックス専門書店とは対照的に、総合書店はショッピングモールから近 隣地域までのさまざまな場所で展開する。しかしかつての新聞の売店とは 異なり、これらの店舗も大都市にある。そのうえ総合書店では、ニール・ ゲイマン (Neil Gaiman) の『サンドマン (Sandman)』シリーズや、トーキョー ポップ (Tokyopop) 社によって英訳された日本のマンガといった、諸外 国のグラフィック・ノベルしか取り扱っていない。『ツレセ (Trese)』(Tan and Baldisimo 2008) や『ザザ・ザツーナー (Zsa Zsa Zaturnnah)』(Vergara 2003)といったフィリピンのコミックスが販売されても、それらはコミッ クスの棚ではなく"フィリピン・フィクション"のコーナーに置かれてい る。その出版社がドメスティック、つまりフィリピン国内の出版社として

分類されているためである。

このような書店側の移り変わりのほかに、コミックスの購買についても変化が起きている。消費者は、ローカルな作品へほとんど、あるいは全くアクセスできなかったために、コミックス専門書店の出現やインターネットの発展とともに、アメコミへと、のちの時代には日本マンガへと興味を移した。この変容は、アメコミの登場と発行の定期性と、日本の「単行本(tankôbon)」の提供する値段相応のコンテンツにも裏付けられていた。

ローカルなコミックス作品を促進することのできる場が求められたことで、2005年には「コミコン (Komikon)」が誕生した。これは、さまざまなジャンルのコミックス作家が一堂に会して、コミックス専門店と総合書店と並んで作品の売買をおこなう、一日限りのイベントであった。コミコンでは、テーブルや仕切りといった本を売るブースの他に、作家と研究者たちのトークや、地元作家の授賞式も開催している。しかし、コミコンには弱点もある。それは、マニラで開催されているということである。

したがって、"死"とはじつは"フィリピン・コミックスの死"ではなく、むしろフィリピンの人々がそれまでに慣れ親しんでいた従来のコミックスの購入形態や流通形態からの離脱を意味していたのだといえる。従来のフィリピン・コミックスの出版形態は、38から40ページ構成のアメコミ式コミック・ブックや、アメコミの表現によって支配されていた。近年のコミックスの販売部数やコミックスを読む人々の数は、かつての"黄金期"には及ばない。それにもかかわらず、上述のとおり、1970年代末以降の近年のコミックスこそがフィリピンにおける本当の「ポピュラー」文化だと言えるのである。

4. フィリピン・コミックスの再検討

最近になって再び、フィリピン・コミックスに新たな変化が多数起こっている。出版流通の問題に対処するために、コミックス専門書店と総合書店はすべて、直接店舗を訪れることが困難な客を想定して、オンラインで注文を受け付けるようになっている。また書店では、北米のグラフィック・ノベルに類似するものとしてフィリピン・コミックスを取り扱うよう

になっている。さらに、マーベル社初の正規店舗が、2013 年 9 月 29 日に マニラでオープンした (De Vera 2013b)。

コミコンは他の地域へも広がっていき、2010年に「ビコル・コミックス・コンベンション (Bikol Komiks Convention)」(Regachuelo 2010b)、2012年に「イロイロ・コミック・コン (Iloilo Comic Con)」(Iloilo Comic Convention, Inc. 2014)、そして 2013年には「コミコン・バグイオ (Komikon Baguio)」("Venue" 2013) が発足した。こういったイベントの原型であるコミコンもまた、「アイスクリーム・インディー (Ice Cream Indie)」といったバコロドのグループ ("Ice Cream Indie - About" 2013)、同じく『ザ・ファースト・ビコル・コミックス・アンソロジー (The First Bikol Komiks Anthology)』を出版した「ビコル・コミケロ (Bikol Komikero)」といった地方のグループを迎えるようになった (Regachuelo 2010a)。

さらに、国立の機関がコミックスのための賞を設けて、コミックスを 評価するようになっている。1999年に初めて、国文学開発局(National Book Development Board) が、アーノルド・アーレの『ミソロジー・ク ラス (Mythology Class)』にそうした賞を与えた ("Award Winning Books" 2013)。国文学開発局は、フィリピンの図書出版を開発・援助する政府機 関である。また、文芸評論家と新聞コラムニストからなる「ザ・マニラ・ クリティクス・サークル (The Manila Critics Circle) という団体も、1999 年から 2005 年までの間、コミックスの賞を設けていた(National Book Awards Winners 2013)。2005 年にニール・ゲイマンがフィリピンを訪れた 際には、フリー・ブックドという書店チェーンが「フィリピン・グラフィッ ク・フィクション・アワード (Philippine Graphic Fiction Awards) | を設置し、 受賞作品をアンソロジーとして収集して出版した("Neil Gaiman and Philippine Graphic Fiction Awardees" 2013)。近年では、フィリピンの外務省も 自国のクリエイティブな才能を促進させることを願って、コミックスに 焦点を当て選定・収集するようになっている("DFA Lecture on Philippine Comics" 2013)

このように現在、フィリピン・コミックスは新しく興味深い局面を迎えている。フィリピン・コミックスなど存在しない、と過去の"死"につ

いて繰り返し言及するのではなく、この先どう変化していくのかを期待してみていきたい。

参考文献・ウェブサイト

- Alanguilan, Gerry. "Funny Komiks Returns!" *Komikero Dot Com.* 2008. http://gerry. alanguilan.com/archives/640(最終確認 2014 年 2 月 24 日)
- —— "Philippine Comics: Struggling or Not?" *Komikero Dot Com.* 2010. http://gerry.alanguilan.com/archives/2888(最終確認 2014 年 2 月 24 日)
- Arre, Arnold. *The Mythology Class: A Graphic Novel*. Quezon City, Philippines: Adarna House, 2005.
- "Award Winning Books." *National Book Development Board*. Accessed December 27. 2013. http://nbdb.gov.ph/nbdb-awb/index.php(最終確認 2014 年 2 月 24 日)
- Barcelona, Noel Sales. "The Comics Wars." *Bulatlat.* May 9. 2009. http://bulatlat.com/main/2009/05/09/the-comics-wars/ (最終確認 2014 年 2 月 24 日)
- Busch, Wilhelm. *Max Und Moritz: Eine Bubengeschichte in Sieben Streichen [Max and Moritz: A Boy's Story with Seven Strikes*]. E-book (PDF). Project Gutenberg. Accessed December 26. 2013. http://www.gutenberg.org/files/17161/17161-pdf.pdf(最終確認 2014 年 2 月 24 日)
- Cheng Chua, Karl. "The Stories They Tell: Komiks during the Japanese Occupation, 1942-1944." *Philippine Studies* 53 (1): 2005, pp. 59–90.
- Culture Crash Comics. "Culture Crash Comics on DeviantArt." *DeviantArt.* December 3. 2009. http://culturecrashcomics.deviantart.com(最終確認 2014 年 2 月 24 日)
- De Vera, Ruel S. "The Filbar's Adventure Continues." *Inquirer.net*. September 7. 2013a. http://lifestyle.inquirer.net/124179/the-filbars-adventure-continues(最終確認 2014 年 2 月 24 日)
- —— "Marvel Arrives in Manila with a Kapow!" *Inquirer.net*. 2013b. http://lifestyle.in-quirer.net/129023/marvel-arrives-in-manila-with-a-kapow(最終確認 2014 年 2 月 24 日)
- "DFA Organizes Lecture on Current Issues on Phl Animation and Comics Industries." *Republic of the Philippines Department of Foreign Affairs*. September 20. 2013. https://www.dfa.gov.ph/index.php/2013-06-27-21-50-36/dfa-releases/845-dfa-organizes-lecture-on-current-issues-on-phl-animation-and-comics-industries(最終確認 2014 年 2 月 24 日)
- Fadul, Jose, ed. Encyclopedia Rizaliana: Student Edition. North Carolina: Lulu Press, Inc. 2008.
- Flores, Emil M. 2008. "The Death and Life of the Komiks." *Azrael's Merryland*. 2008. http://azraelsmerryland.blogspot.jp/2008/02/death-and-life-of-komiks.html(最終確認 2014年2月24日)
- Go, Miriam Grace A. "Pugad Baboy Creator: Online Is the Way to Go." *Rappler*. June 11. 2013. http://www.rappler.com/nation/31028-pugad-baboy-creator-online-is-the-

- way-to-go (最終確認 2014 年 2 月 24 日)
- "Ice Cream Indie About." *Ice Cream Indie Facebook Page*. 2013. https://www.facebook.com/icecreamindie/info(最終確認 2014 年 2 月 24 日)
- "Kwentillion Magazine: A New Source of Young Adult Entertainment." *Summit Media*. May 25. 2012. https://www.summitmedia.com.ph/news/kwentillion-magazine-a-new-source-of-young-adult-entertainment/(最終確認 2014 年 2 月 24 日)
- Lent, John. "From 1928 to 1993: The First 75 Years of Philippine Komiks." *Comic Book Artist* 2 (4), 2004, pp. 74-95.
- The First One Hundred Years of Philippine Komiks and Cartoons. Tagaytay City: Published & produced by Yonzon Associates. 2009.
- Marcelino, Ramon R, ed. "Monkey and the Tortoise." In *A History of Komiks of the Philippines and Other Countries*, Manila: Islas Filipinas, 1985a, pp. 5-10.
- —— ed. A History of Komiks of the Philippines and Other Countries. Manila: Islas Filipinas, 1985b.
- Medina, Pol. Pugad Baboy. 23 vols. Pasig: Anvil, 1995.
- "National Book Awards Winners." *Manila Critic Circle*. 2013. http://manilacritics.tripod. com/w2.html#COM(最終確認 2014 年 2 月 24 日)
- "Neil Gaiman Inspires New Batch of Philippine Graphic/Fiction Awardees." ClickTheCity.com. Accessed December 27. 2013. http://articles.clickthecity.com/7563 (最終確認 2014 年 2 月 24 日)
- Ocampo, Ambeth. "Die Taufe Des R. Pfeiffer Zu Heiligkreuzsteinach [The Baptism of R. Pfeiffer to Heiligkreuzsteinach]." In *A Calendar of Rizaliana*, Manila, Philippines: University of Santo Tomas Publishing House, 2011a, pp. 167-169.
- —— "Si Gahinlalaki [Thumbelina]." In *A Calendar of Rizaliana*, Manila, Philippines: University of Santo Tomas Publishing House, 2011b, p. 204.
- —— "Ang Pandit Na Sisiu Ng Pato [Ugly Duckling]." In *A Calendar of Rizaliana*, Manila, Philippines: University of Santo Tomas Publishing House, 2011c, pp. 203-205.
- "OhNoManga on deviantART." *DeviantArt*. 2013. http://ohnomanga.deviantart.com(最終確認 2014 年 2 月 24 日)
- Philippine Komiks Convention. 2013. "Archives of Previous Komikon Events." 2013. http://www.komikon.org/archives/(最終確認 2014 年 2 月 24 日)
- Regachuelo, Noel. "The First Bikol Komiks Anthology... on the Lose." *Bikol Komikero Digital Portal*. 2010a. http://komixnotdead.blogspot.jp/2010/11/first-bikol-komiks-anthology.html.(最終確認 2014 年 2 月 24 日)
- —— "The 1st Bikol Komiks Convention! The Complete Features." *Bikol Komikero Digital Portal.* 2010b. http://komixnotdead.blogspot.jp/2010/05/1st-bi-kol-komiks-convention-comlete.html(最終確認 2014 年 2 月 24 日)

- Robles, Joms. "Rise and Fall of Komiks." *Panel Magazine*. 2012. http://panelmag.word-press.com/2012/03/20/rise-and-fall-of-komiks/(最終確認 2014 年 2 月 24 日)
- Tan, Budjette, and Kajo Baldisimo. Trese. 5 vols. Visual Print Enterprises, 2008.
- "The Cartoonist: Tony Velasquez and His 'Kenkoy.'" 2013. *Solo (Elite Garments International, Inc.*). 2013. http://solo.com.ph/the-cartoonist-tony-velasquez-and-his-kenkoy/(最終確認 2014 年 2 月 24 日)
- Iloilo Comic Convention, Inc. "Iloilo Comic Con." 2014. http://www.iloilocomiccon. com (最終確認 2014 年 2 月 24 日)
- Valiente, Randy, and Fermin Salvador, ed. *Komiks Sa Paningin Ng Mga Tagakomiks* [Komiks in the View of Komik Creators]. Central Book Supply, Inc., 2007.
- Valmero, Anna. "Mangaholix: Comics Is Our Passion." Inquirer.net. 2008. http://blogs. inquirer.net/hackenslash/2008/10/06/mangaholix-comics-is-our-passion/. (最終確認 2014年2月24日)
- Velasquez, Tony. "Kenkoy." Liwayway, July 29, 1946.
- "Venue." *Komikon Baguio*. 2013. http://komikonbaguio.com/event/venue/(最終確認 2014年2月24日)
- Vergara, Carlo. *Zsazsa Zaturnnah*. 2 vols. Manila: Visual Print Enterprises. 2003. http://visprint.net/publications/zsazsa/(最終確認 2014 年 2 月 24 日)
- Villegas, Dennis. "The Story of Ace Publications." *Pilipino Komiks*. 2005. http://pilipinokomiks.blogspot.com.au/2005/12/story-of-ace-publications.html(最終確認 2014 年 2 月 24 日)
- "PilipinoKomiks: GASI: The Rise and Fall of a Komiks Giant." *Pilipino Komiks*. August 19, 2007. http://pilipinokomiks.blogspot.jp/2007/08/gasithe-rise-and-fall-of-komiks-giant.html(最終確認 2014 年 2 月 24 日)
- Vitangcol, Ace, Glenn Que, Ryan Cordova, Andrew Agoncillo, and Jed Siroy. *Love Is in the Bag.* 4 vols. Manila: Alturia Hill Publishing, 2008.
- Yonzon Studios. "*Mango Comics*." Mango Comics, 2013.http://www.mangocomics.com/ (最終確認 2014 年 2 月 24 日)

カール・イエアン・ウイ・チェン・チュア (Assoc. Prof. Karl Ian Uy CHENG CHUA, PhD) 1980 年、フィリピン生まれ / 一橋大学社会学博士 / アテネオ・デ・マニラ大学歴史学部助教・日本研究科科長 / 日本史、マンガ研究 / "The Stories They Tell: Komiks during the Japanese Occupation, 1942-1944," Philippine Studies, vol. 53, no. 1, 2005, pp. 59 - 90, Controversial History Education in Asian Contexts. (共編著) 2013, Routledge, London, pp. 123-139, Imagining Japan in Post-war East Asia: Identity Politics, Schooling and Popular Culture. (共編著) 2013, Routledge, London, pp. 85-105。

クリスティン・ミシェル・サントス (Kristine Michelle SANTOS) 1983 年、フィリピン生まれ/ウロンゴン大学人間科学博士課程在学/日本史、社会学、ジェンダー論。

カール・イエアン・ウイ・チェン・チュア、クリスティン・ミシェル・サントス





図 1





☑ 3





図 5





図 7

178





図 9



図 11